

## 合同オーケストラ「アフリカンシンフォニー」の歩み、そして…

ヴィータマンズリーコンサート＜アコーディオンとブラス「風のアンサンブル」＞まで、あと40日。昨年のアコーディオンとブラス・ゆう桜ヶ丘20周年「風の音楽会」に続いて、今回もフィナーレは「アフリカンシンフォニー」を企画した。この曲を編曲してより27年経ったが、初演（走れトロイカ '84/1984年）以来、毎年のように演奏され続けてきた。今日はその秘密に迫る……。

### ＜とりくみの始まりは＞

1981年に始まる＜走れトロイカ＞コンサートシリーズはおよそ1年半毎に三AC（三多摩アコーディオンサークル；現在のSACとは別団体）主催で開催され、1990年代半ばまでつづく。cobaもゲスト出演したり、多い時には観客500名を超すアコーディオン界では稀なコンサートであった。初回以来、必ず合同合奏を位置づけ地元三多摩の各団体を中心に、都内や時には埼玉からも駆けつけて合同演奏が行われ、メイン演目の一つとして位置づいてきた。

3年後のコンサート＜走れトロイカ '84＞では、ムソルグスキーの「キエフの大門」がとりあげられたが、仕上がりが芳しくない。コンサートも迫ったある日、「面白い曲があるぞ」と友人が持ち込んだヴァン・マッコイのアルバム（当時はLP）の「アフリカン・シンフォニー」を聞いて、「これは行ける」と火が着き、急遽アレンジしてサークルに持ちこんだら大受け。コンサートではアンコールで再び演奏するはめに。以来、当コンサートではこの曲を2回弾くのが常道となった。

ちなみに作曲者のヴァン・マッコイ（1940～1979）の「ハッスル」は、全米1位・全世界でレコード売上1000万枚の大ヒットを記録し、グラミー賞を受賞。アメリカをはじめ世界中でディスコ・ブームを巻き起こすきっかけとなった。39歳で他界。

こんな大物の曲とはつゆ知らず、この曲に浸っていた時代であった。

### ＜全国合同オーケストラで代々木体育館に出場＞

このコンサートでの成功を受けて翌年、1985年開催の日本のうたごえ祭典（メイン会場：代々木体育館）で「アフリカン・シンフォニー」が取り上げられた。全国から集まった150名のアコーディオンオーケストラとなり、同時演奏のJ.S.バッハの「小フーガト短調」とともにこの曲が、およそ8,000名の聴衆を前で演奏された。（いずれも川口編曲・指揮）

この直前には＜走れトロイカ '82＞で演奏したシベリウスの交響詩「フィンランディア」が同じく全国合同で演奏されている。



この頃、この「アフリカン・シンフォニー」の編曲が、小学校教師の作曲家の研究会のテーマに取り上げられたり、幼稚園のダンスのバックに演奏テープが使われたりもした。今でこそ、高校野球の応援に演奏されたり、ブラスで取り上げたりしているこの曲ではあるが、当時は進んだ高校でまれに取り上げられているに過ぎなかった様である。

### <小学生が卒業記念演奏に>

音楽センター教室 OB に佐々木さんという小学校の先生がいる。直接の生徒ではないが合宿などで度々レッスンを担当、上記の演奏にも参加している。その先生から、小学校の卒業クラス全員で「アフリカン・シンフォニー」を弾きたいからぜひ一度指導にきてほしい、と頼まれた。東京は片田舎の学校に、長い道のりを経て僕は一度だけたずね、可愛らしい子ども達との練習を楽しんできた。

音楽会本番は大成功。演奏はおおいに盛り上がり、母親達からも喝采を受けた、と。37 人の子ども達全員のその時の感想を綴った分厚い文集を、担任の毎週発行の学級通信などとともに事後送ってくれた。子ども達が口々にその時の感動を語っているのだが、中には登校拒否児童も参加した事実も知った。

それらの資料からにじみ出ているもの：一人の情熱的な（音楽教師ではない）教師が、学校の見えない圧力を感じながらも、クラス合奏でこの曲にアタックするという大胆さと意欲。子どもたちもそれにつき動かされて、先生のミスを指摘しながらもしっかりと食いつき、とまどいながらも本番をみんなで乗り切った姿。

佐々木先生は述懐する。「個性尊重が叫ばれながらも教師自らが個性的な実践をすることが困難に……。常に足並みを揃えて、が要求されるからです。コマを流行させると床が傷つくと禁止、けん玉に熱中すると煩いと注意され……。やりきれない空気の中、私なりの精一杯のアンチテーゼのつもりでした」と。

佐々木先生のような情熱的で個性的な教師が、この時代にどれだけいるだろうか。いや、実態は教師の意欲の芽がどんどんつぶされている教育不毛の時代なのだ、といま思う。

熱血教師と、そして無垢な子ども達との新鮮なふれあい。今ではほのぼのとした「アフリカン・シンフォニー」のエピソード。

あれから 21 年。その文集と資料は僕の一生の宝物である。

### <「ちょっとひといきコンサート」でもフィナーレに>

<走れトロイカ>と並行して生まれたこのコンサートは、三多摩アコーディオンクラブ (SAC) の前身、音楽センター中級・研究科三多摩教室の若手によってデビュー。1991 年以来、毎年 250 名



を集めて開催、「アフリカン・シンフォニー」は合同で毎回とりあげられ、フィナーレには必ずこの曲がカーテンコールされた。

特徴的なのは、毎回演奏の中、マンネリズムに陥らないために様々な工夫をしたこと。幼児や小学生を抱える母親は、コンサートのための特別、臨時レッスンにまで参加するのは難しい。それなら子どもを巻き込んだ取り組みを、とその都度、子ども達の参加できる楽器を選んで演奏に巻き込む。幼児には鈴、小学生にはカウベル、そして高学年にはリコーダー、時に中学生にはタンバリンやボンゴ。プロやセミプロの歌手が参加すればボーカルでスキヤットを、と家族ぐるみの取り組みがつづく。こうして 40~50 人のアコーディオンオーケストラが生まれる。

バックにはいつもプロのエキストラが配置されて。ピアノ、コントラバス、パーカッション、ドラムス……。こうした中に、今話題のバンドネオン第一人者・小松亮太が主宰するタンゴバンドレギュラーの佐竹尚（ドラマー）、そして小林照未（パーカス）らがいた。彼らの国立音大学生時代からの付き合いだ。「アコーディオン・サマーフェスタフェスタ 2005（NPO 日本アコーディオン協会主催／江戸・東京博物館ホール）でも東京合同の一つとして演奏が行われたが、彼らが 16 小節のアドリブを加え、またまた新しい「アフリカン・シンフォニー」となった。日本の協会が招聘した中国アコーディオン協会会長・張自強さんが、盛んに感動と連帯の拍手を送ってくれたのが印象的であった。

### <「NHK ニュース おはよう日本」の取材>

1996 年頃、世界で最もアコーディオンの盛んなフィンランド視察旅行 2 回目に子ども達と若者（この時高校生の大田智美さんも随行した）を引率しての視察旅行を終えた直後、NHK の取材があった。フィンランドツアーとは直接関係はないのだが、いま「おは日」と呼ばれる番組でアコーディオン特集を組み、当時ちょっとしたブームのアコーディオンを取り上げたいと国分寺にも取材がきた。2 時間の録画撮りでたった 4~5 分の放映とは恐れ入ったが、国分寺、小金井の教室に他団体の協力も得て「アフリカン・シンフォニー」を演奏した。

テレビの影響は甚大だ。放映後、NHK に教室の問い合わせがたくさんあり、国分寺教室にも数人の入学があった。



### <ベートーベン = 第九の秘密>

年末も迫り、ベートーベンの第九が今年も全国各地で演奏されるだろう。正確には交響曲第九番「合唱付」という。彼の晩年の作品で、通常は 4 つの楽章で出来ている交響曲の第四楽章にはじめて合唱を取り入れた画期的な曲である。その合唱の旋律を「歓喜の歌」といい、子どもから大人まで世界中で親しまれているとても分かり易いメロディだが、第九のなかでは独唱と合唱で様々な変化して延々と歌われている。「おお友よ、～歓喜に満ちあふれる歌を歌おうではないか」とよびかけ、苦悩を突き抜けて歓喜へという精神を歌い上げる。

日本では年末にこの第九を演奏するのが恒例となった。プロの演奏者のみならず、とくに合唱には数多くのアマチュア合唱団員（第九を歌うためにのみ一般募集する形も多い）が演奏に参加している。こうして市民が演奏に参加し、クラシック音楽に親しんでいくことはと



ても大切なことだと僕は思う。

第九が多くの人たちに愛されてきたように、音楽の大衆化ということを考えた時、まず親しみ易いこと、市民レベルでの演奏力でもって表現できること、そして音楽に引きつける魅力があることなどが大事な要素となってくる。

「アフリカン・シンフォニー」が長年演奏され続けてきた中に、その秘密が隠されているように思う。だからこそ、みんなで育んできた曲なんだともいえる。

多くの人たちに愛される曲として、今後も長く弾き続けていきたいと思う。

### <苦悩を突き抜けて歓喜へ>

もちろん、魅力ある演奏にこぎ着けるにはそれなりの苦勞をとまなうものだ。ある程度人数を要するこのような曲はアコーディオンの現状では1団体のみでは難しく、従って合同演奏という形をとる。そのためにはそれに見合った練習会場を確保せねばならない。初心者から上まで様々なレベルの奏者の指導も欠かせない。子持ちのメンバーの練習確保も大変、などなど個人レベル、集団レベルの悩みや問題は多々ある。しかし、こうしたいくつかの難問を一つひとつ解決し、演奏の高みに迫って行く過程があつてこそ本番たった3分の歓喜の頂点に達するのだ。

仕事や介護や子育てや、決して楽ではない環境のなかで練習に参加し、楽器の研鑽をつんでいる。それだけでもすばらしいことだ。でもそんな熱情がひとつになってステージで万来の拍手を浴びた瞬間、その達成感は最高に達する。それだけではない。こうした生き様が、その音楽が、震災や不況で病んだ人々の心に希望の光をともすことができるのだと僕は確信する。いや、そうしなければならない。—苦悩を突き抜けて歓喜へ—

そうした感動の場面をみんなでもともに味わえるよう、残された日々をがんばって行きたいといま切に思う。



2011.11.10

コンサート：アコーディオンとブラス「風のアンサンブル」を前にして

川口裕志